

評議員 津山直一先生の御逝去を悼む

蒲原 宏

平成十七年二月五日心筋梗塞で津山直一東大名譽教授が急逝された。八十一歳。密葬のあと五月八日ホテルオークラでお別れの会が行われ故人の業績と遺徳が偲ばれた。先生の御生涯を追想する写真展示もあり、その幅広い、人間味豊かな人生に参会者は氏の急逝を惜しむことしきりであった。

先生は一九二三(大正十二)年、十二月八日神戸市で出生、七年制の私立甲南高等学校理科乙類から東大医学部に進み一九四六年九月卒業、第一回インターン医師国家試験を一九四七年十月二〇日に合格、東大整形外科に入局、一九五四年東京医科歯科大学整形外科助教授、一九五五年からイギリス Royal National Orthopaedic Hospital に留学、ついで西ドイツのミュンヘン大学整形外科教室に学び一九五八年東大助教授、一九六〇年医学博士学位授与、一九六五年東大整形外科教室第四代目教授に就任一九八四年定年退官、この頃から本学会に顔を見せられるようになった。現職中の整形外科関係の著作は名著『筋電図の臨床』(時実利彦共著)他十四冊、翻訳書十一冊があり。日本の戦後の整形外科発展のリーダーの一人であった。国際整形災害外科学会(SICOT)の日本代表として一九七八年にはSICOT大会(京都)を元本学会員天児民和会長(一九〇五―九五)の事務総長として開催し名声を博した。

一九八四年国立身体障害者リハビリテーションセンター総長、一九九二年退官後は日本肢体不自由児協会会長、整形災害外科学研究助成財団理事長として逝去の日まで宿痾のパーキンソン病と戦いながら尽力された。

人格高潔で、東大医学部では文の人として知られ、堪能なドイツ語、英語の詩の翻訳も見事な作品を残している。しかしこれを誇示することは全くなかったが文学の専門家が驚嘆する名訳である。その一部は随筆集『赤煉瓦雑稿』一九八四



津山直一先生 (1923—2005)

年蝸牛社刊、『花水木雑稿』一九九四年私家版によって知ることができる。「東大整形外科の歌」も先生の作詩である。これがかきつけで、全国大学の「整形外科教室の歌」が作られ制定されるようになった。

祖父は医師であったが篤信の仏教者で名僧七里恒順（一八三五—一九〇〇）に私淑し先生を訓育されたのでその影響で哲学的な思索も深く、学界に常々医学倫理について一言を呈され、信念の人としても尊敬されていた。整形外科の歴史についても伝統ある東大整形外科教室の失なわれた資料についての調査を筆者と共同で行ない、日本への整形外科移入のルーツ解明に尽力された。

日本整形外科の歴史研究を生涯のテーマとしていた筆者を日本整形外科学会、国際整形災害外科学会の検舞台に引づり出し顕彰していただいた大恩の一人でもあった。

翻訳書の一つにラング (Macer Rang) の『整形外科の先達たち』(Anthology of Orthopaedics, 1966 E. & S. Livingstone) がある。これは「雑誌整形外科」(一九七二・七—一九七八・一二)に連載され、整形外科の歴史に対する認識を大いに高めたものであった。出版社の都合で一本として出版されることがなかったのは惜しいことである。何時か世に出てほしい。先生の整形外科史的な論文として興味を引くのは「医学生森林太郎(鷗外)の外科学教科書への書込みについて」(雑誌整形外科三九巻一号二号、一九八八年、同四一卷一号、一九九〇年)の詳細にわたる考證がある。細かい鷗外のドイツ文の書込を丹念に検討し、医史学研究者としても並

でない実力の持主であることを知らされる論文であった。明年(二〇〇六年)は東大に整形外科学教室の創立百年にあたり、東大主催で第八十回日本整形外科学会が開催される予定となっているだけに、先生の急逝は惜しみても余りある。かつて先生が主編者となり日本整形外科学会生みの親田代義徳(一八六四—一九三八)について東大開講七〇周年記念事業として『田代義徳先生—人と業績』(一九七五年刊)をまとめられた。その後の三〇年に亘る資料の蒐集によって日本整形外科学百年の歩みがまとめられる矢先にあつた先生の急逝は学会もさることながら、先生も甚だ無念の思いであつたこととお察し申し上げる。日本の整形外科を世界のトップレベルに肩を並べるまでに成長させた戦後の先尊役としての功績と共に、医史学的にも地味な仕事であるが先見性をもって日本の整形外科学の歴史を研究された先生に深甚の敬意を表する次第である。本当に惜しい人を失つたという惜別、哀悼の言葉をもって筆をおく。心から御冥福をお祈り申し上げます。

***** 事 *****

消 息

矢数道明先生顕彰碑建立

小曾戸 洋

本会名誉会員かつ本会に矢数医史学賞を設けられた矢数道明先生の顕彰碑が、平成十六年十月十日、本会も協賛して竣工された。

建碑地は東京都文京区小石川三丁目の伝通院にある矢数家墓域内。伝通院は浄土宗の名刹で十八檀林の一つ。応永二十二年(一四一五)聖岡せいこうによって開創され寿経寺と称したが、慶長七年(一六〇二)徳川家康の生母・伝通院殿を埋葬したことから伝通院と改称された。千姫や清河八郎・古泉千樞・佐藤春夫・柴田鍊三郎・杉浦重剛墓などもある。

この顕彰碑は、かつて矢数道明先生が主導して建てられた大塚敬節先生顕彰碑をモデルとしたものである。敬

節先生没後、道明先生は尊敬する敬節先生の顕彰碑を建立することを企て、関連団体に働きかけ、敬節先生七回忌の昭和六十一年十月十五日にこれを実現された(都下多磨霊園・大塚家墓域内)。小曾戸はこのとき道明先生の督励のもと、各団体からの集金や、碑文の文案作りを担当した。当時の道明先生から小曾戸への指示書がいまも手もとに残っている。日本東洋医学会・北里東洋医学総合研究所・日本漢方医学研究所・日本医史学会・東亜医学協会・修琴堂同門会の六団体が協賛し、碑の扁題は道明先生自ら揮毫された。碑文の文字は二二行×三五字。

